

NPO

物資支援、炊き出し、雇用創出・・・ 地域の外からの支援に支えられて。

いわき市

吉田 恵美子 NPO 法人ザ・ピープル 理事長

取材日 2011.8.30

ゴミ問題の解決に向け古着のリサイクルを中心に活動に取り組んできた。震災直後からマイクロバスを利用した物資の配送、炊き出し、風評被害に苦しむ農家支援など独自の支援活動に取り組む。その後、いわき市災害救援ボランティアセンターの傘下で活動に取り組み、現在は「小名浜地区復興支援ボランティアセンター」として活動を続けている。

3月11日 14時46分

当日は、毎月1回行われる定例のスタッフミーティングの日だった。いつもは2時間以上かかる会議がその日に限って1時間で終わった。主だったスタッフが帰り、一息ついていたところに誰かの携帯のアラームが鳴った。何の音かわからずいたところに大きな揺れが起き、後からあれが地震速報だったのだと知った。入居しているビルは古く、中には危険だと思ひ裏口から駐車場に避難した。通りすがりの中学生が泣き出すのをなだめ、ビルの屋上の水があふれる様子や、壁が崩れていくのを見ながら地震をやりすごした。

大津波警報は鳴らなかった。消防自動車がサイレンを鳴らしながら走って行き、「大津波警報が出た」と誰かが大声で叫んでいるのを聞いた。いわきの人間は津波に襲われた記憶が無く、津波に対する警戒心が無い。大津波警報がどの程度のものなのか全くイメージできなかった。事務所のある小名浜地区がいわき市内の沿岸部にあるにも関わらず、津波への心配よりも内陸部に位置する自宅の地震による被災や、自宅に居る家族の安否が気にかかって急ぎ帰路についた。付近の工場から避難する人々の車の渋滞に巻き込まれ、津波の到達時刻までに自宅へたどり着けなかったが、津波の直接的な被害は逃れた。スタッフの中には沿岸部を通勤路としている人もいて、会議の時間が延びていれば津波の到達時刻にそこを通っていたかもしれない。震災で活動に若干の支障はきたしたものの、幸いなことに人的な被害は無かった。しかし原発事故の影響で2つの店舗を閉めざるを得なかった。

支援の動き

家庭や家族の事が自分の中である程度収束したのが3月15日。被害の状況が次第に明らかになり、津波で被災された人達が着の身着のまま避難していると聞いて、古着を小名浜にある倉庫から社会福祉協議会の小名浜地区センターへ届けたのが



3月16日、支援活動のスタートだった。当時はガソリン不足がネックとなり、いざという時、自分たちも避難できるように燃料を考えながらの活動だった。そのような中で大阪の市民グループの「赤ちゃん引っ越しプロジェクト」の支援で、いわき市内でマイクロバスを調達することができた。緊急車両の登録を行い、優先的にガソリンを給油できるようにした。本来の目的であった赤ちゃんと母親の避難に関しては諸事情から頓挫したが、後々このマイクロバスが大活躍することになった。

水産加工業者から、津波で冷凍設備が壊れてしまったが冷凍食品が無駄にならないうちに活用して欲しいという申し出があった。市内の福祉施設へ電話をかけ、マイクロバスに魚を積み込んで、欲しいという施設に配り歩いた。

阪神淡路大震災の経験がある兵庫県の業者からは、避難所の床に敷くようにと震災直後にカーペットの提供があった。ところが行政機関では受付窓口も混乱しており、しばらくストックヤードに置かれたままの状況が続いた。避難所では多くの方が寒い思いをして過ごしている。マイクロバスに積み込み自分達で避難所へ配り歩くことにした。この時点で避難所では既に区割りがされていて、改めてカーペットを敷き直すことが難しいところもあり、せつかくの善意がうまく活かされなかった。

活動を通して避難所の方とお話しをするうちに、支給される物の中に本当に必要としている物が無いという声が聞こえてきた。そこで、ニーズを聞き必要な物資を届ける「御用聞き」支援を始めた。これは避難所が閉鎖されるまで続けた。

避難所での炊き出しも行なった。けれども受け取る人の顔は、一様に暗い表情だった。避難所には主婦という料理のプロがいる。そこで、炊き出しの調理のお手伝いをお願いすることにした。すると皆さんの顔が生き生きと変わっていくのがわかった。それからは、いわき産の野菜にこだわって材料を調達して届け、自分達で自炊してもらうスタイルの炊き出しを行った。ここから生まれたのが「かあさん弁当」だ。避難所のお母さんたちを雇用し、400円で日替わり弁当を販売している。おいしいと好評で、徐々に固定客も生まれてきている。また風評被害に苦しむ農家の方々に対して、野菜販売のお手伝いもした。ここまでがザ・ピープルとして独自に行ってきた支援である。

4月も半ばを過ぎると、徐々に避難所から自宅へと戻る動きが起き、支援の内容も個人宅での瓦礫の撤去や泥上げへと変化した。そうすると「NPO法人ザ・ピープル」という名前では、被災者に自宅の中へ迎え入れてもらえるほどの信頼関係が築けておらず、安心して受け入れてもらえるようにと、いわき市の社会福祉協議が立ち上げた災害救援ボランティアセンターの傘下に入ることにした。小名浜地区災害ボランティアセンターは、NPO法人ザ・ピープル、いわき地域活性プロジェクト MUSUBU、学生ボランティア団体 UGMの3つの団体が主体となって運営する大変珍しい形のボランティアセンターであったと思う。

主力メンバーの中に災害ボランティアセンターとしての運営ノウハウを知る人間がいない中で、手探りでスタートだった。1つひとつその場で起きた事に対応する形でノウハウを積み重ね、ボランティアセンターを閉じるまでに全国各地から3,800名のボランティアの参加があり、600近くのニーズに対応することができた。ボランティアからは他のボランティアセンターが事務的であるのに対し、ここはハートがあり暖かく居心地が良いと言ってもらえ、リピーターも多かった。この地域の将来を担う若者達を育てる場として、このボランティアセンターが機能してくれたのではないかと思っている。

いわき市小名浜地区復興支援 ボランティアセンターの立ち上げ

避難所にいた方が仮設住宅や民間借上げ住宅、自宅へと移り、点在する形となった。加えて、原発立地地域である双葉郡の各町村からの避難者もい

わき市内にバラバラに住み始めている。そうした状況の中でも、コミュニティが再生され、被災者自身が支援されているのだという意識を持ちながら頑張る気持ちになってもらえることが重要だと考え、いわき市小名浜地区復興支援ボランティアセンターの立ち上げに至った。

これまで集会所を利用した支援サロン、被災者支援のチャリティーバザーなどを行っている。

「特定非営利活動の種類」の中に「災害救援活動」がある。ザ・ピープルでは自分たちの活動の1つとしてあげていた。はじめからこのような活動を念頭に置いていた訳ではない。古着を集めているので、火災が発生した際、市の福祉部門や警察署からの要請に従い、罹災された家族構成に合わせてすぐに着れる服をお届けする活動を行ってきた。こうした活動であれば我々でもできると考え、パンフレットにも記載していた。記載していたことが今回活動する上で非常に力になり、後ろ盾ともなった。

震災直後は周りのNPOもすべて支援に動いているのだと思っていた。こういう時に動かなければNPOとして、市民グループとして意味がないだろうと勝手に思い込んでいた。

しかし、2ヶ月くらい経過したところで、どうも周りの団体は動いていないと気づいた。我々が早く動くことができたのは、古着という生活に密着したものを扱っていて、手元に持っていたということが1つ。それから団体の構成員に被害が無かったからと考えている。

今後の計画

お弁当の製造でわずかながら雇用を生みだしたが、きちんとした雇用が生みだせるようにしていきたい。食物が耕作できないような土地でコットンなどを栽培し、それにより少しでも土壌が改善され、農家の方々にわずかながらでも収入が生まれたらと考えている。避難されている方々、特にお年寄り自分たちのコミュニティに対する思いは強い。今後は、元いた場所に戻って行うサロンも企画していきたい。仮設住宅は交通の便が悪いので、コミュニティバス運行の仕掛け作りといったお手伝いもしたい。古着だけでなく廃食用油の回収、わりばしの回収も行っているため、既存の取り組みを活用してのコミュニティバス運行など、地域の力を少しでも上向きにしていけたら良いなと考えている最中である。

今回の震災で、市民団体の地域外との交流・連携がセーフティーネットとして十分に機能しうものだと当事者になり強く感じた。これもきちんと検証し、まとめておきたいと思っている。

震災を振り返り

地域にいる者だけでは乗り切れなかった。地域の外からの人、物資、資金、情報などさまざまな支援のおかげで今まで立ち止まることなく進めて来れたのだと思う。今後は外部の関心が薄れて行く、支援の手が止まる、そのことにより被災地が孤立していくことが懸念される。被災地に目を向け、足を運んでくれることが重要で、これまでの支援に感謝すると同時に、今後もその支援を継続していただきたいと思う。



撮影：2011.5.13 松川浦

個人

いわき市

外で遊ぶ子どもの笑顔を見て、ママも笑顔になってほしい。

大平 ひかる オフィス・クワイ

取材日 2011.8.30

震災後、子どもを持つ母として「子どもが家に閉じこもって余震に怯えていたりするのは不自然。本来あるべき姿に子どもたちを戻したい」と思い、子どもを思い切り遊ばせるための「キッズオンパク」の取り組みを始めた。ソーシャルネットワークを通じて、自然学校や環境団体をはじめ多くの団体が活動を支援している。

3月11日 14時46分

いわき市は揺れの時間が最も長く、3分10秒(190秒)も続いた。湯本の町は崩れたりした箇所は無かった。その日はヨガのワークショップ開催に向け、先生を呼んで打ち合わせを行っていた。大きな揺れに驚きラジオをつけると、アナウンサーが「津波の高さは6m」「××地域の津波の到達時間は3時、3時は今です。」と叫んでいた。6mの津波と聞いてもイメージできなかった。後からテレビを見て6mというのは2階建ての家を飲み込むほどのものであることに気づき、大変なことが起きてしまったのだと感じた。湯本だけに限れば、4月11日の地震の方が被害が大きかった。

キッズオンパクのはじまり

3月は避難していた子どもが多かった。30km圏外で避難していなくとも屋内待機していた。外で遊んでいる子はほとんどおらず、買い物に行っても子どもの姿を目にすることは無かった。母親達は情報の交流も無く、自分の家だけ子どもを避難させずにいるのか、他の家はどうか



と不安な日々を過ごしていた。4月になり学校が始まるため避難している人達が戻ってきた。残っていた人も戻ってきた人も不安な状態だった。子ども達と一緒にどこかで遊ばせ、その姿を見たお母さん達も元気になればと始めたのが「キッズオンパク」だ。最初はスタッフ2名で始めた。「こんな時だからこそ子どもたちを思い切り遊ばせたい」と、NPO法人「いわきの森に親しむ会」の全面協力